

第三回

さまざまな去勢1

フラストレーションであるような去勢は、もはや象徴産出的ではない—ハンディキャップのある子ども、どんな去勢も受けてこなかったカティアの症例（面接の完全収録）

参加者： あなたはよく精神分析的治療はさまざまな去勢をもたらすことにあると述べています。口唇的去勢・肛門的去勢、それから性器的去勢のことです。「去勢をもたらす」というのは、正確にはどういう意味でしょうか？

F・D： 去勢、それが口唇的欲動、肛門的欲動、性器的欲動のどれにかんするものであれ、去勢とは、想像界と法によって存在が可能になっている現実とのあいだを区別する手段を、子どもにあたえることにあります。去勢はそれぞれの段階ごとに存在します。

口唇的去勢とは、たとえば子どもを母親の言うことから独立させること、言い換えると母親やだれか他の人の言うことに由来する行為を実行するにあたり、賛成（「はい」）なのかどうか、彼自身で判断できるようにすることにあります。

これについては、お母さん自身がこの水準で去勢されていない場合、われわれはほぼいつもその子に口唇的去勢を与えなければなりません。たとえばお母さんが「息子が反抗的なんです。なにかわたしが言えば、かならず反対のことをするんですよ。」と言ったとします。多くの場合、これはその子が彼自身固有の欲望を表現していること、彼の幻想にかなった欲望を表現していることを暗にほめかしています。

この欲望は多くの場合は完全に実現可能なのですが、じつはお母さんが命令するときに、彼女自身の幻想を子どもが実現するのがみたい、という欲望を伝えるものです。そういう理由でお母さんは子どもが自分の言うことをきかない、子どもが悪いことをしているとつねに非難するのです。彼女は自分の言うことが判断の対象外のひとつの現実として子どもに採用されることを、望んでいるのです。

口唇的去勢の次の例を見てみましょう。ある面接中に、男の子が絵を描いたのですが、爆発物を描きました。「この絵にさわっちゃだめだよ。家がふっとんじゃうからね。」と男性治療者に言います。「ここに置くからさわっちゃだめだ。」そして彼は出ていきました。その次の面接で、彼は「ぼくの絵とつといた？」と訊きます。治療者が「探してごらん。分かるだろう。」と答えると、子どもは「見つからないよ！でもさわらないでって言ったじゃないか！」治療者は「そうだね。触らないで欲しいって言ったよね。君にそう言う権利はあるけど、ものごとは君の言うことや想像に依存してるわけじゃないんだよ。」と答えました。

それはこんなふうに終わったのです。言うこと—つねに言うことは許されています—と、幻想とは独立した、すること、とのちがいを、治療者がもたらしたことをこの子は喜び、

安心していました。これこそ口唇的去勢なのです。

でも口唇的去勢をあたえるときには、その子の言うことが暗にほのめかしている幻想をかならず表象させなくてはなりません、その結果幻想を会話する力を彼に与えることができるのです。さもないと、口唇的欲動—言うこと—は、肛門—すること—のふるいにかからなくなります。肛門的欲動は、痕跡をのこしつつある行為や筋肉の動きをすることを可能にするものですが、そのふるいにかからなくなってしまうのです。この痕跡はもちろん苦しみを隠し持っていますが、想像界にふさわしいものではありません。

肛門的去勢とは、することは実りをもたらすことができないということ、することは産むということとは違うということ子どもに理解させることにあります。

参加者： エディプス的去勢を子どもが受け入れる時期に来ている、と、われわれはなにを目安に判断することができるのでしょうか？

F・D： 子どもが生殖器官を誇ったり、その感じやすさを知ったらです。両親の—つまり男と女、それぞれの—生殖能力の意味を知り、かつ父親と母親の親密な近づきのもつ意味、つまり生殖の意味を知った時です。

ぎゃくに、たとえばある女の子があなたに「男子のおちんちんっていやだなあ」と言うなら、それはまだその子がエディプス的去勢を受け入れる準備ができていないというサインです。

参加者： はい、では象徴的去勢ということばを、あなたは正確にはどう理解しているのでしょうか？

F・D： わたしはこの表現を象徴産出的な去勢、という意味で使っています。つまり欲動が生じている場で、言い換えると欲動がその対象にむけて短絡的な道をとっている地点で、欲動の満足を剥奪するという意味です。それは欲動が移行対象にむけて長い回路を経由するようにするのが目的です。そしてそのあとひきつづいていろんな対象に欲動は向かい、対象間を行き来しながら、最初の対象にふたたび結びつけられるのです。

去勢が象徴産出的であるためには、欲動が、たとえば口唇的欲動が、子どもの身体でその満足を正当にもみいだした時にこそ、介入しなければなりません。

もし根本的なナルシシズムに必要なこの快がはじめに体験されないならば、そのとき去勢はフラストレーションになってしまい、象徴産出的ではなくなってしまいます。

だからこんなふうに言ってみてもいいと思います。まず最初に、子どもは自分がはじめ求めたやり方によって、欲動の満足の快を得なければなりません。それと同時に、口唇的な部分対象—乳房、食べ物、大便、おしっこ、などなど—が子どもの身体に満足をもたらしながら、ある全体対象—その子の世話をしている人物—となんらかの関係をもっている

必要があります。この人物は子どもが愛している人で、かつこの人自身も子どもが満たされた欲動から得ている快を認めているような、そういう人物です。

この人物が子どもにとって欲動の満足と少なくともおなじくらい重要な存在になる時にはじめて、その人の助けによって、子どもは欲動の直接的満足を乗り越えて、コミュニケーションのより上位の水準に達することが可能になるのです。

そのためには三角の状態が存在していなければなりません—母、父、子ども。あるいは母、祖母、子ども。それか母、べつの誰か、子ども、など一言い換えれば、子どもがフラストレーションを起こすのは母親に気に入られるのが目的ではないということ、それがだいじです。そうでなければわれわれは倒錯的な状況に陥ってしまいます。

じっさい子どもは自分が愛する人物に同一化したいと思うものです。この人物が、子ども自身のやり方でよしとするだけでなく、その人自身が欲動を満たすやり方へと、その子を導いていこうするのです。

たとえば口唇的欲動においては、話しながら欲動を満足させるということ、子どもに教えることになるでしょう。じっさい話したり、歌ったり、甘いことばをささやいたりするのは、口の快のひとつなのです。

この人物はふつうはお母さんですが、子どもはお母さんがそういうふうには快を得ていることや、お母さんとおなじようにして彼が快をえることを許可していることにも気がつきます。それからべつの人物とも話すことによって欲動がより長い回路を経由するようにして、この欲動にふさわしいコミュニケーションのスタイルをもつようにと、お母さんが子どもを導こうとしていることにも気がつくのです。

子どもがいつも立ち戻ってしまうような部分的な快を剥奪するのはまさにこのため、その結果、子供はお母さん自身が欲動の満足を得る、より発達したやり方へと導かれるのです。

べつの例をあげましょう。子どもが飴がほしいと大声で泣きわめくようなとき、与えないで「あめについて話してごらん。あなたが好きなのはミント味、いちご味、固いの、柔らかいの、紙にくるんであるものとか・・・」とお母さんが言うとしましょう。こんなふうになれば、お母さんは子どもに飴以上のものを与えたことになるでしょう。

ですから象徴産出的な去勢とはひとりの人物の媒介を要請するものです。この人物は許容的な人物であるとどうじに、障害として存在することも引き受けます。子どもの欲動の満足にたいして漸進的な障害となることで、欲動がべつのある対象に移動することが可能となるのです。

おかげで子どもはべつの人物—あるいはこのべつの人物が表象する対象—とのコミュニケーションに入ることができ、ひとり、またひとりと、他者との交換関係を広げていくことができ、このようにして欲動の満足の領域が拡大されていくのです。

子どもの臨床のなかでいつもわたしがお話しているのは、対象との関係における諸欲動の去勢についてです。なぜならご周知のように、対象による満足と、関係している性感帯

による満足とのふたつが、存在するのですからね。

この去勢は象徴産出的な効果を与えることを目的に与えられます。言い換えるならその欲動のより大きな満足を、より長い回路をとおして、もたらしことを目的としています。そうでなければこれはいんちきになってしまい、ただ子どもが教育者たちによって「犯されて」しまったことを証明するだけです。その子はただ欲求をもつ存在としてだけみなされてしまい、欲望をもつ存在としてはみなされていないことになってしまいます。

想像してみてください。二ヶ月半の息子が指しゃぶりをしているお母さんがいるとします。われわれは短い回路の満足の型をまえにしているわけですが、この子は自分の身体としてみなしている乳房を、ある対象に移し変えたのです。いまや彼は離乳し、母親との関係の中で視覚的、聴覚的、臭覚的な欲動を去勢したのです。彼はそれらを指しゃぶりによって単純に置き換えました。彼にとってはこれは象徴化のようなものですが、しかしながら象徴化ではないのです。

親指というのはたしかに象徴的なものです—乳房の代用品という意味でね—でもこの去勢はべつの主体との関係によってでない象徴産出的にはなりません。彼の親指は部分対象として役に立っているにもかかわらず、彼はだまされてそれは全体対象であると信じ込んでしまうのです。子どもは親指を吸うことで快を得ていますが、人となにかやりとりをしているわけではありませんよね。このお母さんはふさわしい時に乳房のかわりとして言語的なコミュニケーションの満足をもたらすことが出来ませんでした。それで子どもは、自分の親指との関係がお母さんとの象徴的な関係なのだど錯覚して、言語的なコミュニケーションの満足に置き換えてしまったのです。でもこれはじつは口唇的なマスターベーションでしかありません。

参加者： もしよろしければカティアの症例を取り上げたいと思います。彼女は4歳になる女の子で、動作性の障害があり、両脚に器具を装着しています。学校で問題をおこしていたため精神病のレッテルを貼られていましたが、フランソワーズ・ドルトは一回目の面接ですぐに、彼女がみんなとおなじように学校に行けると直感しました。ほかの多くの障害児のように、カティアはいかなる去勢も受けてこなかったのだと見破ったのです。

F・D： よろしいですか。それではカティアにわたしがあつた二回目の面接を、とおして読んでみましようか¹。

¹ フランソワーズ・ドルトは自分の役を読む。彼女が介入するのは、エコール・フロイディエンヌで月二回おこなわれるセミナーの出席者にたいしてか、読んでいるテキストに転記されているものか、トゥルソー病院の彼女の外来に立ち会っている人たちにたいしてである。

フランソワーズ・ドルトはトゥルソーでは毎週火曜日の朝9時から昼の2時まで、4年にわたり子どもたちを診ていた。はじめレネ教授の局で働いていたが、その局はその後ラプレーニュ教授に引き継がれ、今日ではラサル教授が責任者である。

ここに渡されたテキストはトゥルソーでの面接一回分を一語一語書き留めたものであり、

「カティアが部屋に入ると、みながそろって言う。

—こんにちはお母さん、お父さん、こんにちはカティア。」

ドルト、セミナーの聴講生にむかって： わたしはときどき面接の陪席者たちに合図をして、古代の合唱隊が子どものだれそれを迎えるようにするんですよ。

「フランソワーズ・ドルト（カティアに向かって）： ドルト先生を覚えてますか？

カティア： わたしはメダルがほしいの。

フランソワーズ・ドルト： なにが？あなたはまだ歩けないのね。

カティア（彼女はがらがらを手をしている。がらがらはプラスチック製で、色とりどりの卵形の玉がいくつもくっついている）： これアイスに似てる！（ばら色の玉を指して）いちごのアイス、（黄色の玉を指して）バニラアイス、（青色の玉を指して）チョコレートアイス！」

フランソワーズ・ドルト、セミナーの聴講生に向かって： ここでわたしはひらめいたんです！青色の玉が、チョコレートだって！

「カティアはすぐに言い足して：それからフランボワーズのアイス。」

フランソワーズ・ドルト、セミナーで： わたしの名前はフランソワーズです！この子は青色のチョコレートアイスから、女性的な色のフランボワーズにうつったのだと思います。つまり彼女はわたしと関係をつないだのです。これが彼女を、ゾンビのような存在、つまり男の子でも女の子でもない存在としてありつづけるのをやめて、女性になることを可能にするのです。

社会的には、カティアは動作性のハンディキャップを持つ子どもの身分をもち、それが彼女をほかの子どもたちとはちがった存在にしています。そして幼い子が他人とちがうとき、その子は女の子でも男の子でもない、グループ全体に異質な、部分対象になってしまうものなのです。

「フランソワーズ・ドルト（カティアにむかって）：アイスクリームね！

カティア（フランソワーズ・ドルトにむかって）： アイスクリームっておいしい！

フランソワーズ・ドルト： あなたは女の子でしょう。だから「カティア、彼はやさしい」「カティアはいい男の子だ」とは言いませんよ。カティアはドルト先生でもありません。」

フランソワーズ・ドルト（セミナーの聴講生に向かって）： こういうふうに説明してみ

面接にはカティアの両親も同席していた。

ました。というのは彼女の話し方を直したら、彼女は激怒していたからなのです。

「カティア：はい、ドルト先生。

フランソワーズ・ドルト： はいって？彼女はなにがはい、なの？

カティア： いちごあじ。

フランソワーズ・ドルト： そうよね、いちご味よね！

カティア： うんち！うんち！

フランソワーズ・ドルト： 男の子だったらどうかな、カティア考えてみて！

カティア： いちごあじ！

フランソワーズ・ドルト： いちご味ねえ。チョコレートの色はなに？

カティア： あおいろ。きいろはバニラ。

フランソワーズ・ドルト： それはレモンかも知れないわね。あなたはドルト先生と反対のことを言ってもいいのよ。ちがうと言っていいし、わたしを困らせてもいいのよ。

カティア： おとこのこは、バニラあじのおおきなアイスをかうの。

フランソワーズ・ドルト： じゃあ女の子は？

カティア： わたしメダルがほしい。

フランソワーズ・ドルト： なにが？」

それからセミナーのひとへ向かって： さいしょとまったくおなじです！

「フランソワーズ・ドルト（カティアにむかって）： メダルってなんのこと？

カティア： メダルをするつもりよ。

フランソワーズ・ドルト： そうね。メダルにはなにが描かれている？

カティア： ひも。^{ficelle}

フランソワーズ・ドルト： 息子-彼女ですって？ああ、ぜったいにだめですよ。メダルを持っていたのはだれ？

カティア（沈黙し、答えたがらないが、そのあと困ったようすで言う）： はい。

フランソワーズ・ドルト： 彼女はいいえと言いたいのよ！

カティア： これべとべとするわ。（このとき彼女の口からたくさんよだれが出てくる）

フランソワーズ・ドルト： そのさいしょのメダルはなにからはじまったの？だれが持っていましたか？犬？それはメダルだった、ペンダントだった？

カティア： メダル。

フランソワーズ・ドルト： ああ、わたしはあんまり馬鹿だからメダルを描くことができないの。あなたは描けるわよねえ。メダルっていうのは硬貨みたいな、丸くて、わっかがあるやつよね。くさりで首にひっかかっているものことよね。」

フランソワーズドルト、セミナーの出席者にむかって： 思い出しましたが、このとき

カティアはペンダントをした女性が部屋から出ていくのを見ていました。

「フランソワーズ・ドルト（カティアに）：見てごらん、あの女性が首のまわりにしてるでしょ、あれがペンダントというのよ。でもあなたがメダルについて話してくれるとうれしいんだけどなあ。（カティアの両親にむかって）：彼女が生まれたとき、メダルをもっていたんですか？」

フランソワーズ・ドルト： セミナーの出席者にむかって： メダルは彼女にとって鍵となるシンフィアンなのです、彼女がまだほんとに小さかったころからの。お父さんが言うには、彼女はつねにメダルを欲しがっていたということです。それでわたしはメダルの絵を描きました。

「カティア（紙に描かれたメダルを指して）： わたしこれほしいな。

フランソワーズ・ドルト： 人がなにかの絵を描くときには、こころのなかにそれがちょっと存在しているものなのよ。メダルについて話してちょうだい。だれかになるためにあなたが持ちたいと思っている、そのメダルをもっていたのはだれなの？」

カティアの父親： わたしの母がペンダントを身につけています。」

フランソワーズ・ドルト、セミナー出席者にむかって： 彼はもっと早くそう言えたでしょうにねえ！

「カティア： おばあちゃん！」

フランソワーズ・ドルト、セミナー出席者にむかって： このとき、トゥルソーの面談の出席者のひとりが立ち上がって、ばら色のメダルをわたしに渡しに来ました。

「カティア： わたしそれつけたい！

フランソワーズ・ドルト： 欲しいとおもうのは許されているけど、ばら色のメダルをあなたがつけるのはだめなのよ。あなたは苦しみから治るためにここにいるのであって、苦しみをなにかに置きかえるためではないのですよ。」

フランソワーズ・ドルト、セミナーに向けて： この言い方、これはとてもだいじです。これは去勢の部分を残してありますからね。つまり、子どもが持ちたいと望んでいるものの代理品をけって与えないで、それを表象させ、それについて語らせるのです。その子が望んでいる当のものをわれわれが与えてしまうなら、分析作業全体とその進展に必要なテンションとが、おじゃんになってしまうのです。カティアが要求したのはメダルで、これは明らかに、お父さんのお母さんになりたいという彼女の願望をあらわしています。カティアはじつはトゥルソーの出席者のある女性がペンダントをしているのを見て、おばあ

ちゃんのことを思い出したのです。彼女は父親のためにおばあちゃんになりたいのです、おそらく父親はその母にたいへんな愛着をもって結びついているのでしょう、息子が—彼女にというやりかたによってです。さっき出てきたあのひもによって、ね。

カティアはおばあちゃんとエディプスの競合関係にあるのです、言い換えると、お父さんがそのお母さんと、自分のエディプスを終えられなかったんですね。父親は諸欲動をもっていて、それは、彼の母との息子が—彼女に結びついているような関係のなかで巻き込まれつづけている、そういう欲動なのです。

「カティア： あしたは（彼女は泣きだす）、あしたはそれつけるもん、あしたはそれつけるもん。

フランソワーズ・ドルト： ええ、あした、あなたが大きくなったときにね。なにがあなたをそんなに悲しませているの？あなたが持っていないなにかをだれかは持っているみたいだね。メダルを持っていたのはおばあちゃん、お父さんのお母さんでしょう。あなたがほしいメダル全部をもっている女の子を描いてごらん。

カティア： ひとばらいろのメダルをつけてもいいの？

フランソワーズ・ドルト： 人？人ってだれ？あなたはつねに「わたしは」って言いましょうね。」

フランソワーズ・ドルト、セミナー出席者にむかって： 人、それは彼女と父親のことでしょう、おそらく。

「カティア： わたしばらいろのメダルをつけたい。

フランソワーズ・ドルト： することが出来ないことをしたいと思うのって、困ったことよね。カティア、あなたが望むけれど持つことができないものはたくさんあるわ。たとえばあなたは歩けなくていらいらするわよね。ばら色のメダル、これは偽のなぐさめなの。どうしてあなたは歩けないのか知ってる？

カティア： いいえ。（沈黙したあとで）：ばらいろのメダルがほしい。

フランソワーズ・ドルト： だめです！（それからカティアの両親にむかって）：このまえお会いしてから、なにかわたしにおっしゃりたいことはないですか？お母さん、カティアに今日来るように言いましたか？

カティアの母親： はい、彼女には定期的に話をしています。

カティアの父親： 彼女が要求したんです、両脚を動かせるようにドルト先生に助けてもらいたかったんです。

フランソワーズ・ドルト： ええ、そうですね。お友だちはいるの、カティア？

カティア（ぼんやりとしている、それからフランソワーズ・ドルトを見て言う）：ドルト、ヴァンギューイ。」

フランソワーズ・ドルト、セミナー出席者にむかって： ここにはなにか圧縮があると考えられます。ヴァレリーの名前がつぎに出てくるのですが、彼女は自分が動かせない両脚のヴァルギュス^{外反性}についてもほのめかしているのです。

「フランソワーズ・ドルト（カティアにむかって）： あなたの手はじょうぶで、粘土をこねられるわね。

カティア：それはいたいわ！

フランソワーズ・ドルト： いいえ、痛くないわよ！粘土はものなのよ、あなたは強くひっかいてもいいのよ。痛くないし、苦しいことでもないのよ。」

フランソワーズ・ドルト、セミナー出席者にむかって： 彼女は粘土に攻撃をくわえているところでした。

「フランソワーズ・ドルト： あなたはいくつになるの？

カティア： 4さい。

フランソワーズ・ドルト： それは大きいわね。（小さいあひるを見せながら）、これ、なんだか分かる？

カティア： ちいさいあひる。

フランソワーズ・ドルト： あひるはなんて鳴くの？

カティア： がーがー。

フランソワーズ・ドルト： あなたはいま何をつくるつもりなの？

カティア： あおいしいぬと、きいろいいぬ。

フランソワーズ・ドルト： そのあひると同じくらい太っているか、すこし小さいかね。犬というのは頭があって、からだがあって、しっぽを持っています。犬はなんて鳴く？

カティア： わんわん！

フランソワーズ・ドルト： あなたの知っている犬は、なんていう名前なの？

カティアの父親： 犬を一匹買ってあげたかったんです、彼のために・・・（言い直して）、いえ、彼女のために・・・。でも彼女がとても怖がってしまっ。

フランソワーズ・ドルト： 雄の犬ですか？」

フランソワーズ・ドルト、セミナー出席者に： 雄の犬でしょう、だって、彼のため、なんですから！

「カティアの父親： そうです。

カティア： これはあかちゃんのおとこのいぬなの。

フランソワーズ・ドルト： その犬が大きくなったら、パパの犬になるの、それともママの犬になる？

カティア： ママ。

フランソワーズ・ドルト： あなたが大きくなったら、あなたはなにになる？

カティア： 女の人、ママみたいな。(彼女は黙る)

フランソワーズ・ドルト： それについて考えているなんて、驚いたわ。

カティア： シア^{le chiat}。

フランソワーズ・ドルト： シア？シアン^犬なの^猫シャなの？シア、それはなににも意味しません。シャかシアンか、女の子か男の子か、どうじに二つはありえませんよ。うんちをすることは、フランス語ではよくシエ^{chier}と言われるわね。アン・シア、これはたぶん犬の子どもで、アン・シオ、これはママ犬とパパ犬から生まれた子のことね。あなたは自分が望んでいることが分からないのね。あなたはカティアになりたい、カティアは女の子でありたい？あなたが親鳥²のおなか²にいたときには、パパにもっとも近いのか、ママにもっとも近いのか、あなたは分からなかったのよね。

カティア： 玉。

フランソワーズ・ドルト： パパの玉？ママの玉？

カティア (花人形をもって)： これ手袋みたい。」

フランソワーズ・ドルト、セミナー出席者にむかって： 彼女が話を変えました。

「フランソワーズ・ドルト： おかしな人形ね。

カティア： おかしなヴァレリー！

フランソワーズ・ドルト： あなたのお人形さんたちはみんなヴァレリーなの？

カティアの母： いいえ、彼女の親友の名前がヴァレリーなんです。

カティアは指しゃぶりする。

フランソワーズ・ドルト： さようなら。おしゃぶりしたり、親指を吸うのは、とても小さかったころのあなたに似ているわね。つぎは二週間後にする、それとも一ヵ月後にする？

カティア： にしゅうかんご。おもちゃがたおれちゃった、ないちゃだめ。

フランソワーズ・ドルト： 泣くのは構わないのよ、カティア、あなたは泣いていいんですよ。

カティア： ないちゃだめよ。

フランソワーズ・ドルト： 泣くのはとってもいいことよ、泣くのを困ると思う人は残念ねえ、泣くのは目からでる水みたいなものよ。ドルト先生は泣いてはいけないとは言いませんよ。

カティアは出て行く。」

² もちろん子どもに親鳥とはなんであるか説明することが必要である。

F・D： 読み返してみて面白いと思ったのは、カティアが玉のイメージ、つまりもっとも太古的なイメージに、ふたたびたどりつかなければならなかったことです。それは必要なことでした、彼女の母親にとっては子どもは全員ヴァレリーと呼ばれているようだからです。彼女のお友だち、人形、などなどね。じつは、お母さんにとりカティアもまた名前のない人形だったのです。彼女は名前をあたえられていませんでした、不具だという理由でね。両親にとって、これはたいへんな試練であるような状態だったのです。そういうわけでカティアはおそらくおばあちゃんになろうとしたのでしょうし、原光景においてふたつの性が結びつくことが可能だということを否定しようとしたり、二種類の大人になることができるということを否定しようとしたのです。結果的に、玉の太古的なあのイメージにふたたびたどり着くことができ、指しゃぶりをしたり泣いたりすること、つまり羊水によって濡れた目に回帰できました。彼女は一瞬とても遠くの地点まで退行することができましたが、それはこの面接のなかで、連続して去勢のてほどきを受けた、そのあとでのことでしたね。

面接はうまく行きました、カティアは二週間後に来たいと言ったのですから。

初回とくらべてかなりの進歩がすでに見られます。初回は彼女は関係をもつことができないようでした、わたしが彼女に言ったこととはなんの関係もないようなことばを適当に投げかけてくるばかりだったのです。

参加者： ではいま、読まれたこの面接について、なにかおっしゃっていただけませんか？

F・D： けっきょくこの面接があらわしているのは、子どもが部分対象を欲するとき、それはかならずある人物への同一化をしながらである、ということです。

心理療法家のおおくはそのことを忘れています。もし子どもが花を摘むなら、それはかならずだれかのためです。もし子どもが話すなら、それはかならずだれかに向けてであり、ひとりで話すためではぜったいにありません。またそれはかならずしもそこにいる人物に向けて、ではありません。

子どものすべての動作、すべての行為、すべてのことばは、あるだれかとの想像的な関係のなかで、なされたり言われたりするものなのです。

たとえばもし子どもがあなたに「これがほしいな」と言ったら、「なにをするため？」と答えましょう。その子が「それほしい」と言ったら、「だれのようになるため？だれみたいにしたいの？」と訊ねるのです。そうしたらその子は答えるでしょう。

子どもがなにかをしたり、言ったりするときにはつねに、ある人物に同一化する目的があつてのことです。この人物とはその子にとって発展的なイメージを表象している人物か、あるいは他人に評価されているイメージを表象している人物なのです。

ⁱ Ils sont bons, les glaces! アイスは女性名詞だが、カティアは男性形人称代名詞で受けている。